

Column Bar 信州 第62回 テーマ 『友情』

『Column Bar 信州』 今宵もOPENです。

さて、当店は、皆さんにバーテンダーになってもらい、

テーマにあったオリジナルのコラム=カクテルを振る舞っていただくという趣向です。

お客さんはメルマガ読者さんです。



『Column Bar 信州』 音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

今回は、信州読書会キャスの特別企画『武者 ナイト』と題して

武者小路実篤の小説『友情』の読書感想文を書いていただきました。

朗読はこちら

<https://youtu.be/ScORGQ4-5mM>

それではご紹介していきます。初登場、メルマガ読者Kさん

『友情』 読書感想文

この「友情」という小説を最初に読み終えたときに感じたことは、野島と大宮の美しい友情が、杉子との恋愛を通して引き裂かれてしまった。というものだった。結局のところ、友情よりも愛情なのか、とも感じたものだ。

しかし、その後「ツアラトウストラはこう言った」の“友”という章に触れることでそれが激変した。ツアラトウストラは、友というのは敬い合い、乗り越え合う関係であり、そのために時として敵同士にもなる関係であると語っている。こうした友情を大宮は一貫して持っているのではないだろうか。

読者の私には、野島と大宮を比較して野島の至らない部分が映ってしまうのだが、大宮は野島の良い部分だけを見ており、杉子にもいい部分を見るように望んでいた。そして、杉子と野島が絶対に結ばれないことを悟ると、今度は野島の敵に回るのである。しかし、それは野島を叩きのめすためでは決してなく、野島が友として自分の前に立ちはだかるのを望んだからなのである。

こうした友情観は野島には最初にはなかったように思えるが、物語終了時点には野島にも伝染しており、こうした友情観に従って大宮が雑誌にすべてを暴露してしまったことを理解できているようである。

THE BLUE HEARTS の [「人にやさしく」](#) という歌の中で

～期待はずれの 言葉を言うときに 心の中では ガンバレって言っている～

という歌詞があるが、まさに大宮はこのような心境だったのであろう。

対立の末に美しい友情が生まれる物語は数多くあり、ハムレットとレイアーティーズの決闘後の相互理解などは、感動を覚えるのだが、この「友情」という話を通して友情を持っているが故に、あえて対立するという形もあるのでは、ということを考えるようになった。仮にそういう形もあるだとして、実践するならどちらが難しいかは明らかである。

(おわり)

『小説「友情」における「自然」』

この作品は、恋愛を描いた青春小説として読み継がれているという。私自身も、人物と場の描写や、未熟であり世慣れしないもしてない野島視点の語り手の描写により張られたボールが、最後の手紙のやりとりで剥がされていく見事な展開に、ある種の緊張感をもって引き込まれてしまった。それだけでも十分に読み応えがあるのだが、個人的にこの小説のテーマは、「友情」と「自然」にあるとみているので、そこに触れたいと思う。

「自然」の意味するところはひとつではない。にわかフランス思想かぶれの大宮はどうも、はっきりした考えをもたないようだが、作者の武者小路実篤にとっては、神の意思である。作者は、「自然」が本来あるべきかたちをとって機能する状態を理想としている。そのことは、彼が開いた「新しき村」の理念に表れている。

小説において「自然」は、大宮と杉子が男女として結びつくことを主張している。双方の社会的環境および身体的特徴、考え方に卓球というアイテムといった諸々が、ふたりの相性の良さをつくり、出会いから結末に至るまで、それにふさわしい展開が与えられていて、しかもその恋愛成就是、周囲から全く受け入れられ、祝福されるものであった。さらに、不自然で凶々しい要求を持ち続ける野島との対比が、その正当性をより際立たせている。

作者が感銘を受けたという夏目漱石の小説「それから」で取り上げられた「自然」に、客観性までも与えて、鮮明に打ち出したということであろう。

「自然」とは、まったく正しいものであって、すべてはそれに従い成立しなければならない。「友情」もその例外ではない。作者は敢えてその正しさを、若きキリスト者、野島に叩きつけたのだ。

小説において「友情」は、思想および利害関係で引き裂かれた両者においても成立している様が描かれていて、その徳の高さを主張している。それによってタイトルに、正当性が与えられている。

(おわり)

『友情』 読書感想文

大宮「なんとでも言え。おれは運命の与えてくれたものをとる（中略）それは自分たちが選択して決めることのできる道ではなく、強いられておのずと入る道である」

野島「君よ、僕のことは心配しないでくれ。（中略）これが神から与えられた杯ならばともかく自分はそれのみほさなければならない」

この二人の、潔さに私は感動した。友情は、こんなふう実際に存在するのだと。

友達は、何のために存在するのか？時に私は懐疑的になる。年賀状に象徴されるように、家族の幸せを称え合うような、「私」が主語になっていない同年代の女友達を思い浮かべると、本当に友達って必要なのだろうか？と真剣に考えてしまう。

しかし最近仕事で60代～70代の人と接することが多くなり、少し考えが変わってきた。老いてもなお女性同士ワイワイとおしゃべりしている姿は楽しそうだ。お互いにただ一緒に過ごすのが楽しくて仕方がない様子だ。そのうち私は自分がその年代になったらどんな生活をしているだろうかと想像することが増えた。人生のカウントダウンが意識にのぼると、現役時代の職歴や結婚歴や学歴などは全く意味をなさない、ただ骨と皮をまとったYというただ一人の人間として、呼吸をしている。そのとき、周囲にいるのはおそらく自分と同じ、「ただそれだけ」になった人たちだ。私は目の前のその人と、手と手を取り合い友達になる。お互いが存在することが心の支えとなる。これは妄想が過ぎるだろうか？

大宮にとっての野島、野島にとっての大宮は人生の節目節目で互いを意識し、想像し、感謝する存在であり続けるだろう。ともに同じ時期に生まれ、同じ時期に死を意識し、この世を去っていく、ここを通わせた赤の他人。それは友情というよりも、人類愛だ。

野島が大宮の友情に心が満たされていたのは事実だろう。私は男が男にこれほどまでに献身できるのかと正直驚いた。杉子は「女に生まれてよかった」と言うが、男女の愛をしのぐ「友情」の存在に気付いた杉子が野島に嫉妬する日は遠くないだろうと思う。

（おわり）

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

「友情」の感想文

武者小路実篤の「友情」を初めて読んだ。今からちょうど100年ほど前の作品であるにもかかわらず、100年の隔たりを感じずに読めた。

野島と大宮のお互いの友情とその間に一人の女性杉子をめぐっての自身の内面で激しく葛藤する姿が克明に描かれている。

野島の、杉子の一挙手一投足に感情を激しく揺さぶられ、杉子の振る舞いが自身の世界のすべてであるかのような捉え方、杉子の周りに男が近づけば先を越されてしまうのではないかという嫉妬心は、私自身も体験し、苦悶したことがあり、身につまされるような、また思わず走り出したくなる思いがした。

大宮は野島との友情を優先させ、あくまで野島に気を遣い、自分の気持ちを偽ろうとするのに対して、野島は一貫して自分本位である。大宮が実は杉子への思いを断つために西洋に留学を決断するのを、野島は大宮の気も知らずに内心よこんでいたり極めて自分に正直であり、よくも悪くも人間くさいところにこちら知らぬ間に感情移入している。

面白く感じたのは、杉子に求婚の手紙を送った文士の卵の手紙も野島の手紙も（また杉子が大宮に宛てた手紙までも）、皮肉にもどれも似たような内容だということだ。

それぞれが自分の思いのたけを時間をかけて、また自分の人生を懸けて推敲したものに違いないが、それらは1ミリたりとも相手の心を動かしはしない。手紙を受け取った者もまた自分の思いを託し、別の相手に同じくらいの熱情で手紙を書くという皮肉。

「杉子の…笑い声がまじっていた。…自分の病気なぞは杉子にとっては蚤が喰ったほどにも思われぬのだ。彼は腹が立って来た。勝手にしろと思った」（野島）

「女のまわりに多くの男があさましく集ってその女を女王のように大事にして、肉慾をかくした衣をきた狼の仲間入りするのがいやでもあった」（大宮）

男性の、というか自分の心理をここまでリアルに表現されると、もはや笑うしかない。それほどに恋愛というのは古今東西、普遍的なものであり、人はみな別々のようで似た者同士であるとしみじみ感じた。

（おわり）

『友情』感想 ～ rival in love ～

野島は、大宮のような男が恋敵で、本当に幸いだった。

「恋」が、すべて一対一の関係なら、人間の悩み事の総数は減っていただろう。しかし、恋は「する」ものではなく、「落ちる」ものと言われる。自分の意思とは関係ないところで、突然始まってしまう。よって、野島、杉子、大宮のような恋愛模様に陥ってしまうのだ。ただ、「友情」と「恋愛」はどちらかを選択することで、どちらかを失ってしまうものなのだろうか。

大宮は、野島よりも先に、杉子に想いを寄せていたが、野島の杉子に対する想いを友人として優先させる。野島は、杉子への集中力のあまり、薄々杉子の杉子への想いに感付くが、あきらめられない。野島は、自分の想いを大宮へ吐露し、成就できぬ苦しみにもがくが、陰で苦悩していた大宮の心情には無頓着だ。大宮自身は、想い人から思われる幸せを退けてまでも、野島の恋の成就に心を砕く。

しかし、それも少しでも杉子に野島を想う気持ちがあればのことだ。いくら杉子に懇願しても、野島への気持ちが全く芽生えないとわかり、初めて自分の気持ちに正直になる。

恋は「落ちる」ものなのだから、杉子がいくら懇願されても無理なのは致し方ない。大宮自身も、結局杉子への想いを捨てきれなかった。杉子の杉子への想いに気付いてさえも求婚した野島も然りだ。三人とも「落ちて」しまったのだから。

大宮が、杉子との恋愛を成就させたことはエゴだとは思わない。杉子に野島への想いが微塵もないことを、杉子の言葉で知らされたことは、野島にとっては短期的には苦しくても、否が応でも次へ進むステップになる。大宮がすべてを正直に晒してくれ、さらに野島自身に「友情」の裁きを委ねたことは、大宮が野島を友人として本当に大切にしている証だと感じた。人間は曖昧なものに、余計な希望を見出してしまうからだ。自分の気持ちを抑えてまでも野島の恋愛に協力した大宮が、完膚までなきに杉子への想いを断ち切らせたことは、本当の「友情」だと心に沁みだ。だからこそ、野島もデスマスクを壊すことで怒りを昇華させ、けりをつけることができたと思う。

恋敵が大宮でなければ、ただでさえ苦しい失恋がもっと長引いていたことだろう。

成就するだけが恋ではないと、年齢を経た今ならわかる。ただ、失恋も恋愛のうちだというのも、当人には酷なことだろう。

大失恋・・・いいじゃないか。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

宮澤です。

『マジ無理だから』

再読すれば、のじまに対して「シムラ～うしろしろ！！」叫びたくなる。「のじま、大宮と一緒にいると、杉子の可愛らしい小顔はポツと赤くなっているゾ。なぜそれに気づかないのだ、のじま！」杉子がピンポンでうまいことやると、我がことのように喜んで、「よし！」とか声を上げてしまう、間抜けな、のじま。神ってるほど、純粋なおとこ、のじー。肉欲を隠した狼の群れが、のじーの運動神経の悪さを、笑い者にしようと、悪ノリしたとき、仁王の如くラケットを手にした大宮が立ちはだかるシーンがこの小説のハイライトだ。ちやほやされて、調子づいて、のじーを嵌めようとするゲスの策略に気づかない、あるいは気づかないふりをしているゲスの極み乙女、杉子に、大宮は怒りのスマッシュを叩き込み、江戸の敵を鎌倉で討つような獅子奮迅をみせる。上気したおでこに張り付いた髪の毛をなで上げる杉子の目には、のじーは見えない。その代わりに、怒髪天つく大宮に、杉子は荒ぶる神の御神体を見た。のじーは、神を語る男である。神に孤独の試練を与えられるほど愛されている男である。内村鑑三ファンの大宮も、のじーとの友情において神と関係している。しかし、ゲスの極み乙女と、その周辺は、神を解しない、おしまいの人間の群れである。嘘つきの群れである。大宮の倫理的潔癖は、「自分に嘘をつけない」性格にある。つまり、大宮は自己欺瞞が大嫌いなのだ。そして、神ってる、のじーとの関係だけが、大宮の自己欺瞞の罠から救い出してくれた。だから、大宮はのじーが大好きだ。「ゲス乙女、杉子の魂も、願わくばのじーとの関係の中で救い出されてくれればいいのに」と大宮は、力の限り祈る。しかし、神のイタズラなのか、杉子は友のために鬼神と化した大宮に恋することで、「女に生まれてよかった」と神に感謝する。杉子を勝手に理想化して盛り上がり、観音様のように拝んでしまうのじー。そんなのじーを、「マジ無理だから」と生理的に拒否する杉子。このすれちがいの果てに、大宮はパリに逃亡する。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714